けんこう横丁 第64回

保健センターだより

安全と安心

保健センター所長　小町裕志

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんはこれから社会に出ていろいろな方面でご活躍されることと思います。社会では学生の頃にはなかった多種多様なことに直面し、考えたり感じたりする場面がより増えて、視野もより広がるだろうと思います。こうして、さらに充実した一個人が形成されていくのだと思います。それはとても楽しみなことです。これからは問題に直面したときに、学生時代に学んだ知識や経験を活かして、自分で知恵を絞って解決策を考えていかなければなりません。いよいよ、自分の力を試すチャンスがやってきたのです。解決すべきことには正解はありません。社会で直面することは個人にとっての未知との遭遇であると言えるでしょう。

昨年、我々は新型インフルエンザを経験しました。感染はまだ続いていますが、大分下火になってきています。これは、人類にとっては未知との遭遇でした。この豚由来の新しいインフルエンザは、昨年の３月に発生し、当初メキシコでの死亡率の高さが報道され、WHOは「国際的に懸念される公衆の保健上の緊急事態」と位置付けました。さらに、10年程前から強毒性の鳥インフルエンザウィルスのヒトへの感染が散発的に生じており、そのウィルスがヒトからヒトへの感染力を獲得することへの警鐘が鳴らされ、社会の関心も高まっていたこともあって、今回の新型インフルエンザウィルスが弱毒性であるということが判明するまでの間、世界中が半ばパニック状態となりました。

このとき、日本では、国内への新型インフルエンザの侵入を妨げ、国内感染の急激な拡大を防ぐ目的で、水際対策として空港での機内検疫を開始しました。これは世界的にも異例の措置でしたが、この検疫で新型インフルエンザを検知できたこともあって、厚労省は一定の効果を上げたと報じました。実際には、それより早い時期に海外渡航歴のない高校生が国内で初めて新型インフルエンザに罹患していたことが、後に確認されました。その後、関西地区で集団発生があり、機内検疫は一ヶ月ほどで打ち切られることになりました。そして、夏から秋にかけて国内での感染が一気に広がったのは周知のことです。国内では現在までに２千万人以上が感染しました。結果的には、水際対策とうたわれた検疫はほとんど無意味であったように思われます。本当の安全を得ることは、安心を求めることとは意味合いが異なります。安心は安全が確保された上で成立します。念のためとか大事を取ってというような裏付けのない安心を過剰に求めてしまうと、余分な時間とエネルギーを必要として無駄が生じます。資源も時間も豊富であればこういう安心策も可能なのかも知れませんが、今の世の中にはそれほどの余裕はありません。

卒業生の皆さんがこれから社会に出て様々な問題に直面し、解決策を検討していく上で、あまり安心にこだわりすぎると問題の本質の絞り込みに、時間のロス等の無駄が生じ、飛躍のチャンスを逃がしてしまうこともあるでしょう。安心なところに安住していては進歩も上達もありません。科学に裏打ちされた安全が確保されることは最低限必要ですが、安心を得ることに重心を掛けすぎず、さらに、安全からかけ離れてしまった、いわば底上げされた安心に惑わされることなく、直面するいろいろなものごとに果敢に取り組んで、社会の中に羽ばたいていっていただければと思います。ご活躍をお祈りしています。